

「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた指導法を探る
～英語学習の初期段階における書く活動を通して～

1 設定理由

文部科学省は、2011年度より始めた「学びのイノベーション事業」において、これまでの一方向・一斉授業による学びから、子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）に転換していくことを求めている。また、2017年7月に公表された新学習指導要領解説では、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」とある。そこで、新学習指導要領の3. 指導計画の作成と内容の取扱い(2)カで示された「身近で簡単な事柄について、友だちに質問をしたり質問に答えたりする力を育成するため、ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について適宜工夫すること」に迫るための授業改善をしたいと考えた。

これまで3年間の系統立てた指導を目指し、常に「CAN-DO リスト」に照らし合わせながら新学習指導要領の求める授業改善にとりくんできたことを見直し、英語科における「主体的・対話的で深い学び」の視点の有効な取り入れ方を探ることとし、本主題を設定した。

2 研究仮説

- (1) 書く活動において、双方向の英語でのやり取りを活用した指導を継続的に行えば、生徒たちはより多くの英文で表現することができるようになるだろう。
- (2) 書く活動において、協働学習を取り入れることで、生徒たちは個人の伸長を実感し、協働学習が有効であると感じるだろう。

3 研究内容

- (1) 統合的な書く活動を支える帯活動の工夫
- (2) 協働学習を取り入れた授業実践
- (3) 事後アンケート

4 結論

- (1) 継続的な帯活動により、短時間で生徒たちはたくさんの質問を英語でできるようになり、より多くの英文を間違いを恐れずに積極的に書くことができるようになった。
- (2) 「主体的・対話的で深い学び」を目指した書くことの授業を通して、生徒たちは、協働学習が自らの学習を深めることに有効であると実感できた。

研究主題

「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた指導法を探る ～英語学習の初期段階における書く活動を通して～

1 主題設定の理由

文部科学省は 21 世紀を生きる子どもたちに求められる力を育む教育を実現することを目的として、2011 年度より「学びのイノベーション事業」を始めた。この事業において、これまでの一方向・一斉授業による学びから、子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）に転換していくことが求められている。2017 年 7 月に公表された新学習指導要領解説では、「これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められる」とある。そこで、新学習指導要領の 3. 指導計画の作成と内容の取扱い(2)カで示された「身近で簡単な事柄について、友だちに質問をしたり質問に答えたりする力を育成するため、ペア・ワーク、グループ・ワークなどの学習形態について適宜工夫すること」に迫るための授業改善をしたいと考えた。

昨年度まで勤務していた千葉市立幕張中学校の第 1 学年生徒 124 人を対象に、2016 年 5 月に学習調査アンケートを実施した。以下の結果から、生徒たちは協働学習に対しては肯定的なイメージを多く持っていることが分かる。これは、日頃より、ペアやグループ等での話し合い活動を取り入れている成果と考えられる。

アンケート項目	4 段階
授業では、学級の友だちとの間で話し合う活動を行っている。	3.5
グループ活動で学習したことは個人で学んだことより身に付いている。	3.0
グループ活動をすると友だちの意見を聞くことができ考えが広がると思う。	3.5
授業で友だちと話し合うことで、より深く考えることができると思う。	3.5

そこで本研究では、研究主題を「『主体的・対話的で深い学び』の視点を取り入れた指導法を探る～英語学習の初期段階における書く活動を通して～」と設定し、生徒たちの実態を踏まえて、これまでとりこんできた「CAN-DO リスト」に照らし合わせた 3 年間の系統立てた指導をもう一度見直し、英語科における有効な取り入れ方を探ることとした。また研究対象が英語学習の初期段階である中学 1 年生であることから、本研究における書く力を、「間違いを恐れずにより多くの英文で積極的に書く力」とし研究を進めた。

2 研究仮説

- (1) 書く活動において、双方向の英語でのやり取りを活用した指導を継続的に行えば、生徒たちはより多くの英文で表現することができるようになるだろう。
- (2) 書く活動において、協働学習を取り入れることで、生徒たちは個人の伸長を実感し、協働学習が有効であると感じるだろう。

3 研究内容 (調査対象：千葉市立幕張中学校 2016 年度 第1 学年 124 人)

(1) 統合的な書く活動を支える帯活動の工夫

【第1 学年「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標】 … 「資料1」

◎話すこと (やり取り)

尋ねられたことに対して、簡単な表現を用いながら適切に応じることができる。

この目標に基づいて、ウォームアップ後に10 分間ペアでインタビューをする活動を10 月に毎回ペアを変えて8 回実施した。活動は、ペアのパートナーの紹介文を書くという活動である。紹介文を書くために、まず1 分間でできる限りたくさん紹介文の材料となる内容をインタビューする。聞き取った情報はマッピングの形でメモしていく。インタビュー後に、マッピングのメモをもとに紹介文を書くという流れである。

また、ポスト調査として、年度末の3 月23 日に実施をした。

【活動の流れ】 … 「資料2」

- ① ペアでジャンケンをして、勝った人から1 分間インタビューを始め、聞きとった内容をマッピングの形でメモする。
- ② 1 分後に役割を交代して、負けた人が1 分間インタビューを行う。
- ③ 聞いた情報について5 分間で英語でまとめる。
※単語の綴りが不安なときは辞書を活用してもよい。
- ④ 紹介文をペアで聞き合う。
- ⑤ 学級全体で数人発表する。
- ⑥ ワークシートに振り返り事項を記入する。
- ⑦ ワークシートを提出する。

活動を進めていく上で、以下の2 点を中心に指導を行った。

① 使用する動詞の種類について

どうしても、生徒たちは使いやすい like や play などの動詞を多く用いて表現するため、表現の幅が広がらない。そこで、これまでに習った動詞を紹介し、様々な動詞が使えることに気付かせ、文のバリエーションをつける工夫をした。また、教科書ではまだ学習していない動詞でも、小学校時代に“Hi, friends!”を通して学習した動詞についても、英語でのやりとりの中では使用できることを伝え、特に can などの表現を生徒たちは使用していた。小学校からの接続を意識し、中学1 年生の1 年間は、小学校時代に使用していた“Hi, friends!”の2 冊を持参させ、常に小学校時代での学習内容を振り返られるようにした。手元に“Hi, friends!”があるので、生徒たちは使えそうな表現などを積極的に探すようになった。

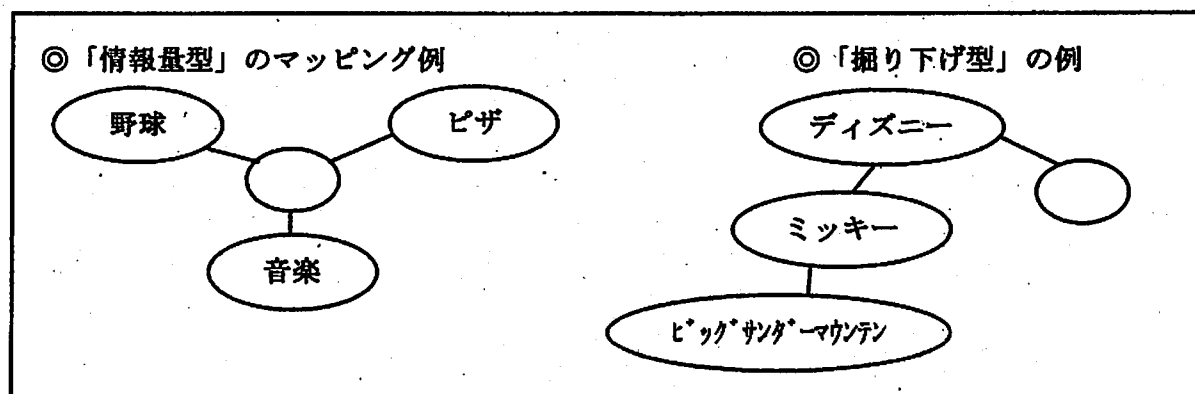
② マッピングの質について

マッピングでまとめる際に、生徒たちには2通りのマッピングのまとめ形「情報量型」「掘り下げ型」を示した。

「情報量型」とは、質問の内容は多岐にわたっているが、逆に話題が分散してしまうため、書いている英文に一貫性がないものである。

一方「掘り下げ型」とは、1つのテーマに関する質問をどんどんしていくものである。話題としての広がりはないが、一貫性があり、内容のまとまりがある英文となる。

両方とも、一長一短があるので、片方を否定し、もう一方を推奨することはしなかったが、できる限り「掘り下げ型」を目指し、一貫性のある英文に仕上げていくように指導をした。これは、「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標の第2学年の「書くこと」の目標に、「将来の夢や行きたい国について、適切な表現を用いてまとまりのある英語を書くことができる」を意識し、指導したものである。（「資料1」参照）



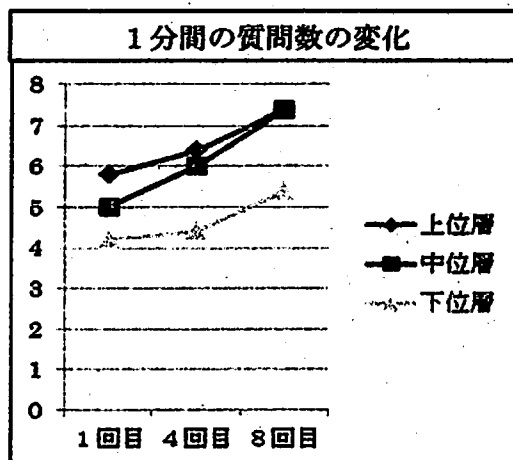
《結果の分析》

8回の帯活動において、1分間の質問数、そして使用した動詞の種類の変化を分析した。その際、定期試験の点数をもとに、平均が80点以上を上位層、40点から79点を中位層、39点以下を下位層と成績別に分類し、無作為にそれぞれ5人の生徒を抽出し、それぞれの平均値のデータの比較を使った。また、8回の帯活動から5か月後の年度末（3月23日）に実施をしたポスト調査との比較を通して、実施した帯活動が生徒たちの中にどの程度定着しているのかを、質問の数と使用している動詞の種類においてデータ比較を実施した。

① 1分間の質問数

全8回の調査の変化をまとめたのが右のグラフである。いずれの層の生徒たちも増加傾向にあった。回数を重ねるごとに、生徒たちは1分間でたくさんの質問をすることができるようになったことが分かる。

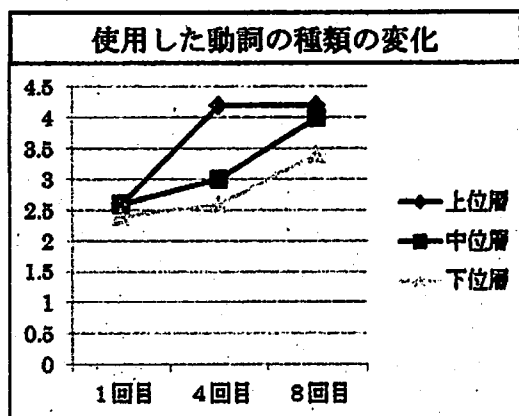
	1回目	4回目	8回目
上位層	5.8個	6.4個	7.4個
中位層	5.0個	6.0個	7.4個
下位層	4.2個	4.4個	5.4個



② 使用した動詞の種類の変化

全8回の調査の中で、生徒たちには意図的にたくさんの動詞を使用するように促していった。その結果、それぞれの3つの層の生徒たちは増加傾向が見られた。回数を重ねるごとに、生徒たちは偏った動詞のみを使用するのではなく、いくつかの種類を使えるようになったことが分かる。

	1回目	4回目	8回目
上位層	2.6個	4.2個	4.2個
中位層	2.6個	3.0個	4.0個
下位層	2.4個	2.6個	3.4個



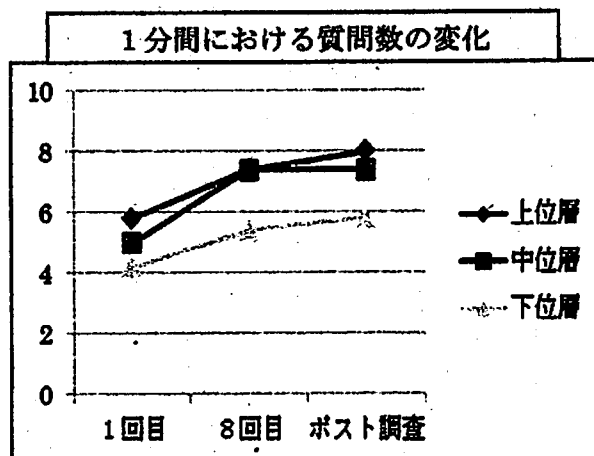
《実際に使用した動詞の種類》

□で囲っている動詞は、1回目、4回目、8回目と共通して使用された動詞

	1回目	4回目	8回目
上位層	<u>play</u> am <u>like</u> is <u>have</u>	<u>like</u> walk <u>play</u> know read <u>have</u> want go make use is	is <u>like</u> want <u>play</u> cannot play eat <u>have</u> study know get up cannot speak go
中位層	am want <u>have</u> <u>like</u> <u>know</u>	<u>like</u> play <u>know</u> want <u>have</u> practice	<u>have</u> play <u>like</u> <u>know</u> cook want watch cannot play can cook can speak cannot play
下位層	<u>like</u> am have play	<u>like</u> have play study know	<u>like</u> is cannot speak know want cook

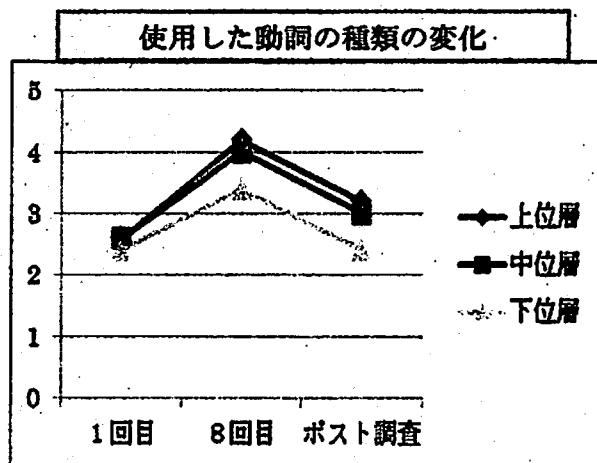
③ ポスト調査における質問の数の変化

帯活動として8回連続で実施をしていたので、ある程度の数値的な増加は見られたが、どの程度生徒たちに定着しているのかを、年度末の3月にポスト調査として実施をした結果と比較をする。1分間における質問の数については、それぞれの層の生徒たちは、最後の8回目の数値と同じ、もしくはそれ以上の数値となった。授業の中で質問の仕方が身に付き、毎回それが生かされたのではないかと考える。このことから、帯活動を通して生徒たちにきちんと定着したということが分かる。



④ ポスト調査における動詞の数の変化

動詞の数における変化については、8回目とポスト調査を比べると下降傾向にあることが分かる。しかしながら、1回目と比較すると、ポスト調査では上位層、中位層は上昇傾向にある。一方で下位層の生徒たちは1回目の平均と同じ数値となった。定着率という点で考えると、やや改善の余地があることが分かる。原因として、帯活動の際には生徒たちは意識して多くの種類を使おうとしていたが、ポスト調査ではその意識が薄くなったと考えられる。



⑤ 使われている動詞の種類の変化

回数を重ねるごとに生徒たちはどのような動詞を使用しているのか、動詞の種類を分析した。今回は、上位層、中位層、下位層から無作為に1人ずつ生徒を抽出し、上位生徒A、中位生徒B、下位生徒Cとした。下の表からもわかるように、どの生徒も like は毎回使用していることがわかる。次いで、eat、have、know などの動詞も使用頻度が高い。また、中位生徒Bの8回目では、can を使用した表現が出てくる。これは、指導の中で小中連携を意識し、小学校時代に活用していた “Hi, friends!” に出てくる表現も使用していこうと促した結果である。実際にこの時期にはまだ中学校の授業では can を扱っていないが、会話の中では使用できていることが分かる。中位生徒Bのポスト調査では、went を使用しており、これは2か月前に学習した過去形が定着していることが言える。

	1回目	8回目	ポスト調査
上位生徒A	like have	like have eat play study know	like eat know is
中位生徒B	like have	like watch can play can cook	like have want went is
下位生徒C	like	like play know want cook	like know is

(2) 協働学習を取り入れた授業実践 … 「資料4」

10月に実施した「友だちの紹介文を作成する」(NEW CROWN ENGLISH SERIES 1 Project 2 「友だちにインタビューをしよう」)という単元での実践である。

【第1学年「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標】

◎話すこと（発表）

自己紹介や友だち紹介を簡単な表現を用いながら伝えることができる。

◎話すこと（やり取り）

尋ねられたことに対して、簡単な表現を用いながら適切に応じることができる。

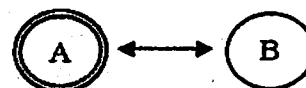
◎書くこと

自己紹介や友だち紹介を、簡単な英語表現を用いて書くことができる。

【実践授業の全体イメージ図】

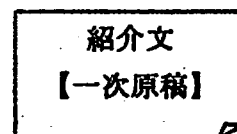
① 情報収集（1分間）

ペアになり、互いの紹介文を書く際に必要な情報収集をインタビューしあう。



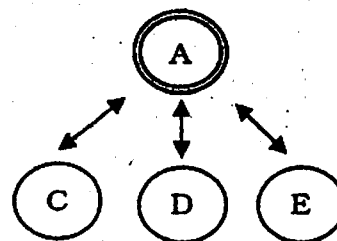
② 一次原稿の作成

インタビューで得た情報をもとに、一次原稿として紹介文を作成する。



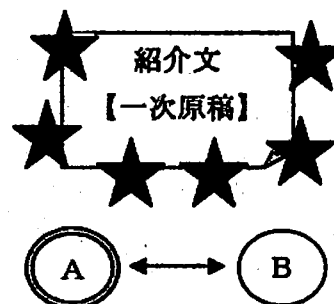
③ 小グループでの発表（1人2分間）

4人グループになり、紹介文を発表する。そのあと、聞き手から紹介文に関する質問をたくさん受け、紹介文を書く際の新たな視点をもらう。（右図の★マークが答えられなかった質問事項）



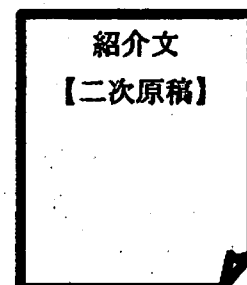
④ 2回目の情報収集（1分間）

もう一度、最初のペアに戻り、小グループでの発表の際に友だちからもらった新たな視点を聞き直し、紹介文に蓄ける情報を増やす。

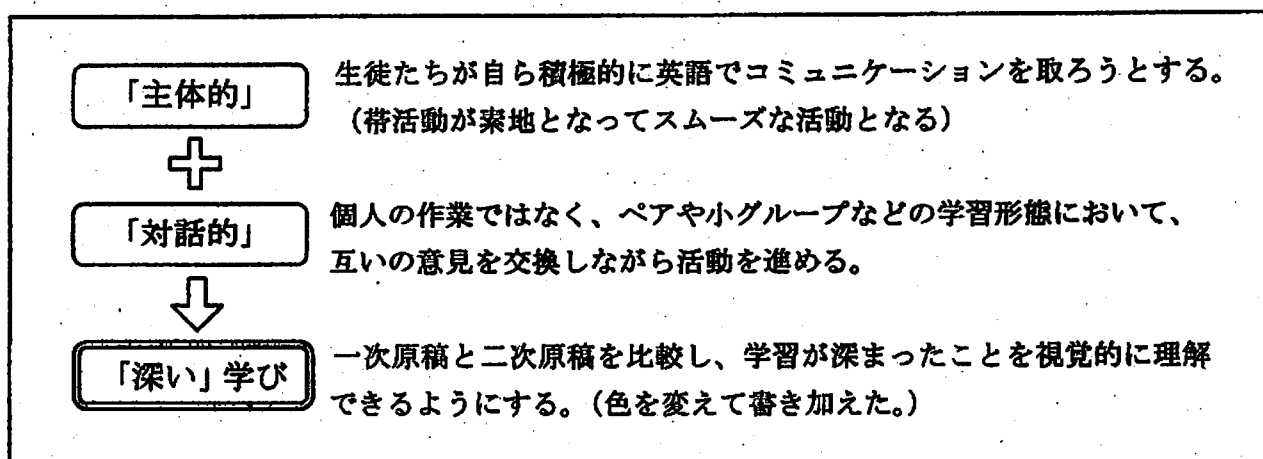


⑤ 二次原稿の作成

一次原稿に新しく書き加えた情報については、色を変えたり、下線を引くなどして、視覚的に分かりやすく書く。



【今回の学習の全体イメージ図】

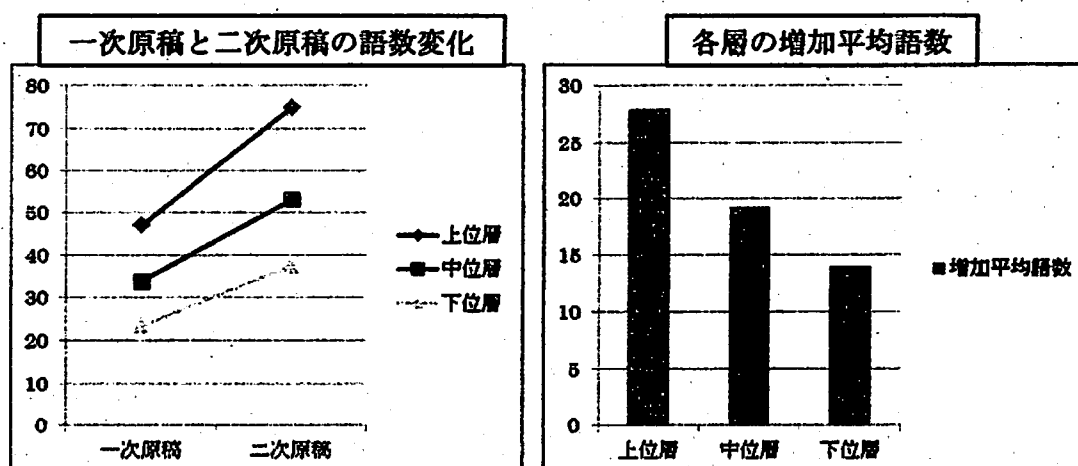


学習を深めていくための手立てとして、友だちとの協働学習を取り入れる。なお、「主体的・対話的で深い学び」が見られる場面の観点として、信州大学大学院教育学研究科 高度教職実践専攻（教職大学院）の青木 一准教授のご指導により（「資料5」）、できる限り学習の成果などが可視化できるような工夫を取り入れた。具体的に1点目として、学習形態の工夫をした。一人の学習ではなく、ペア学習、小グループ学習を取り入れながら、他者との関わりを大切にして学習を進めた。2点目として、一人一人が思考・判断する場面の設定として、振り返りの工夫をした。小グループでの活動を通して、もう一度自分自身で友だちの紹介文を練り直す時間を設けた。新たな視点をもらい、改めて自分自身で作成した紹介文と向き合う時間の中で、じっくり考える時間とした。そして、友だちとの関わりの中で新たに深めることができた箇所は、紹介文を書く際に色を変えて書き加えるように指示を出した。そうすることで、今回の授業を通してどの程度深めることができたか対比をすることができ、視覚的に理解しやすくなった。

＜結果の分析＞

① 一次原稿から二次原稿への語数変化

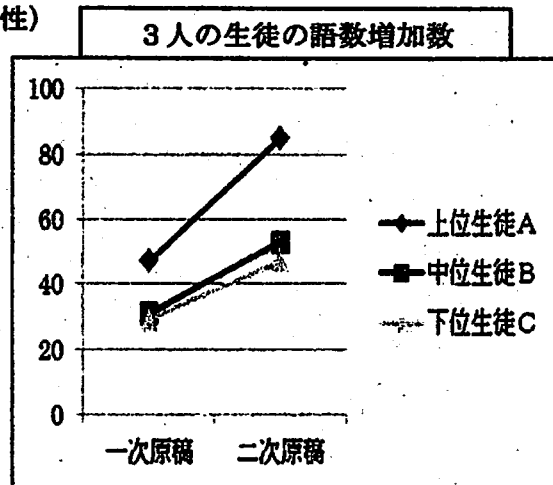
一次原稿をもとに、小グループでのやり取りを通し、友だちから新たな視点を得てインタビューし直して作成した二次原稿での語数の増加については、左下のグラフの通り、上位層、中位層、下位層ともに増加となった。特に、上位層においては、増加率が顕著となった。



② 使用している動詞の種類（帯活動との関連性）

二次原稿の作成にあたって、帯活動がどの程度有効であったのか、生徒たちが使用している動詞の種類で分析をした。それぞれ、上位層、中位層、下位層から無作為に抽出した3人の生徒で分析をした。3人の生徒たちの一次原稿から二次原稿への語数増加については右図の通り、3人とも増加した。

次に、それぞれの生徒たちが二次原稿で使用していた動詞については以下の表の通りである。



生徒	二次原稿で使った動詞	総語数
上位生徒A	<u>like</u> <u>have</u> <u>play</u>	75語
中位生徒B	<u>like</u> <u>play</u> <u>have</u> <u>is</u> <u>can cook</u> <u>live</u>	53語
下位生徒C	<u>like</u> <u>know</u> <u>play</u> <u>have</u>	37語

表の中の□で囲っている動詞は、帯活動でも使用している動詞である。このことから、帯活動との関連性を見ることができる。また、中位生徒の can cook については、前述した通り、「Hi, friends!」との関連性が考えられる。さらに、中位生徒Bの□で囲まれていない is や live については、友だちとの協働学習を通して得た新たな視点である。協働学習の有用性についてもここから読み取ることができる。

また、上位生徒Aが使用している動詞の種類は他の生徒に比べると制限があるが、生徒が書いた英文を分析してみると、but などを上手に活用した「掘り下げ型」の英文となることが分かる。イタリア料理が好きだという内容から、友だちとの協働学習を通して、テーマを深く掘り下げ話題を広げ、更にイタリア料理から日本食はどうかという話題に発展したと考えられる。この点からも協働学習の有用性を見ることができる。

She likes Italian food. She likes margarita pizza. She likes cheese very much. She doesn't like olive.

She likes Japanese food. She likes miso soup and tempura. But she doesn't like sushi.

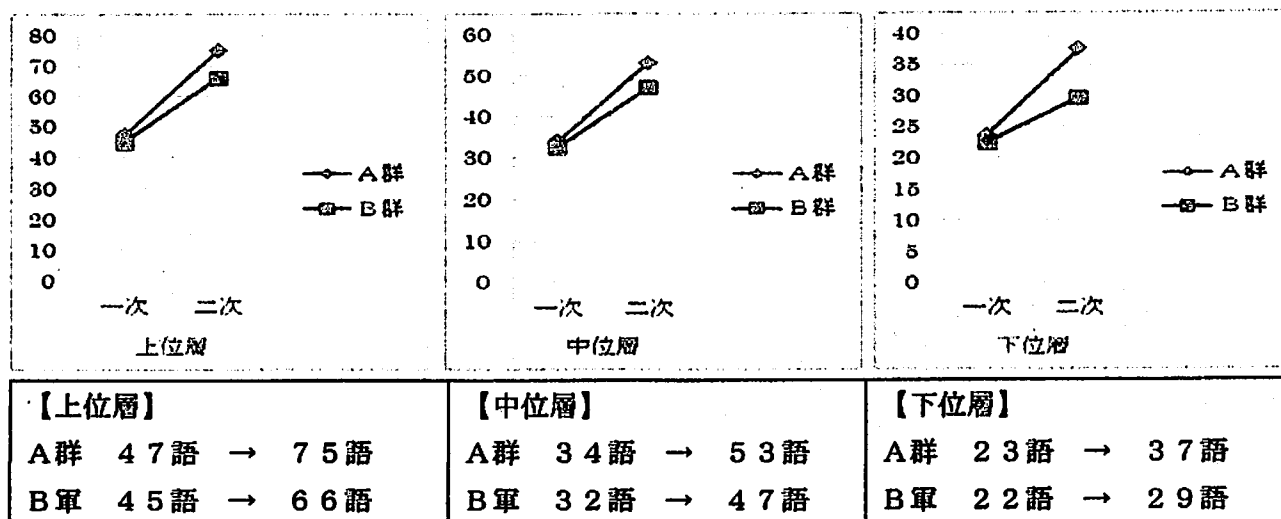
※生徒原文よりスペリングミスを訂正。下線部が二次原稿で増えた英文

③ 一次原稿から二次原稿への語数変化（帯活動との関連性）

帯活動が本当に有効な手立てであったのか、2つの集団を比較して検証をした。帯活動を8回実施した集団をA群とする。そして、半分の4回しか実施をしなかった集団をB群とし、定期試験の点数をもとに、平均が80点以上を上位層、40点から79点を中位層、39点以下を下位層と成績別に分類し、無作為にそれぞれ5人の生徒を抽出し、それぞれの平均値のデ

一タを使った。

3つの層ともに、スタートの一次原稿での語数はほぼ同じと言える。しかし、小グループでの発表を経て、二次原稿作成段階に移ると、語数での開きが目立った。いずれの集団もA群の増加率の方が高いことが分かる。このことから、帯活動が有効であったことが分かる。

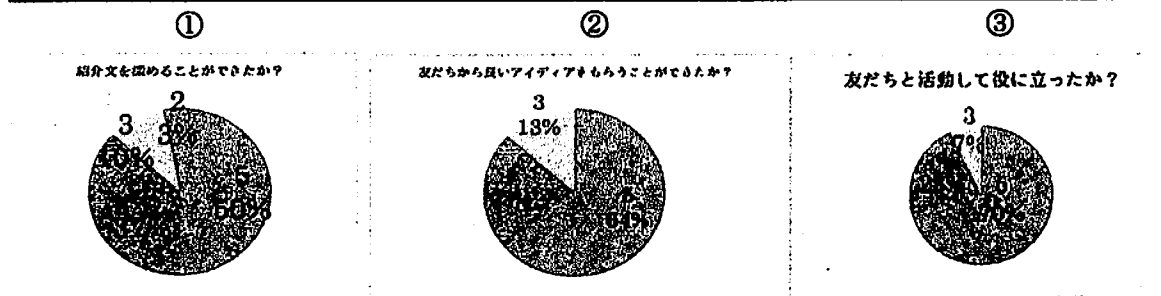


(3) 事後アンケート

① 協働学習について

授業実施後に実施したアンケート項目から以下の3つのデータを分析した。

	質問事項	肯定的回答率
①	「紹介文を深めることができましたか？」	87%
②	「友だちから良いアイデアをもらうことができましたか？」	87%
③	「友だちと活動して役に立ちましたか？」	93%



なお、アンケートについては、5段階評価での選択とし、そのうち、「5」と「4」を選択した回答率を、「肯定的回答率」とし、データの分析をした。

アンケート結果より、授業を通して多くの生徒たちは目標を達成することができたと感じている。また、一人で学習を進めるより、友だちと協力して学習を進めることで役に立つのだという実感を持てたと考えられる。

この2つの質問から、生徒たちにとって、協働学習は有効であったと分析できる。

② 学習後の自由記述文について（生徒原文そのまま）

【生徒A】班のメンバーで話をするだけで、沢山のアイデアが浮かび、とってもよかったです。そして、紹介文を凄く深められたので楽しかったです。

【生徒B】友だちから、いろいろな質問がきてそれを本人に聞くと、すごく紹介文が増えたので、すごいと思いました。私はまちがえを少しおそれてしまったので、次からはおそれず、しっかりしゃべれるようにしたいです。深められたのでよかったです。

これらの自由記述文より、生徒たちは協働学習が自分たちにとって役に立っていると感じていることが分かる。また、次のような記述文も見られた。

【生徒C】最初らへんは、1分間で5個くらいしか質問することができなかったけど、今日質問したら、9個になったので、よかったと思いました。

【生徒D】日本語で、インタビューするのは簡単だけど、英語でインタビューするのはとても大変だった。だけど、一番最初の頃よりは、動詞が使えるようになった。たくさんの人にインタビューできて楽しかった。

これらの自由記述文は、帯活動の内容に触れており、継続して帯活動を実施した結果、質問の数や使用する動詞の種類などに着目して、生徒個人が成長を感じることができていることがわかる。

4 成果と課題

（1）研究仮説①に対して

【成果】 継続的な帯活動により、短時間で生徒たちはたくさんの質問を英語でできるようになり、より多くの英文を間違いを恐れずに積極的に書くことができるようになった。

【課題】 様々な種類の動詞を使って、多岐にわたる話題について英文を書くことに課題が残った。

（2）研究仮説②に対して

【成果】 「主体的・対話的で深い学び」を目指した書くことの授業を通して、生徒たちは、協働学習が自らの学習を深めることに有効であると実感できた。

【課題】 他技能における「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた有効な手立てを実証研究していく必要がある。

《主な参考文献》

○文部科学省（2014年4月）「学びのイノベーション実証研究報告書」

○青木一（2015年8月）「千葉市立幕張中学校全体研修会講演会資料」

○山本崇雄（2016年12月）「All English でできるアクティブ・ラーニングの英語授業」

学陽書房

○文部科学省（2017年3月）「中学校学習指導要領」

○文部科学省（2017年7月）「中学校学習指導要領解説 外国語編」

資料編

- 1 2016 年度「千葉市立幕張中学校 英語科 CAN-DO リスト」
- 2 帯活動のワークシート
- 3 帯活動での生徒作品
- 4 協働学習を取り入れた授業実践のワークシート
- 5 信州大学大学院教育学研究科 青木 一 准教授 講演会資料より抜粋
- 6 協働学習を取り入れた授業実践 生徒作品
- 7 協働学習を取り入れた授業実践 事後アンケート 生徒コメント

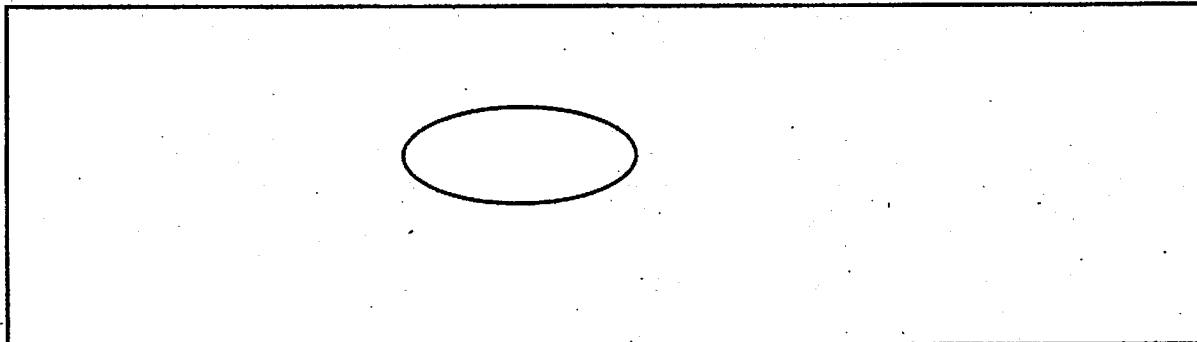
学校番号 No. 11

千葉市立幕張中学校

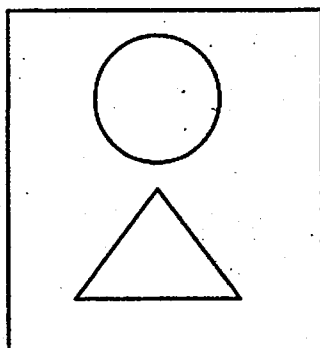
「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標

	第1学年	第2学年	第3学年
話すこと (やり取り)	○尋ねられたことに対して、簡単な表現を用いながら適切に応じることができる。	○日常生活の場面において、自分の気持ちや考えを理由を添えて伝えることができる。	○社会的な話題において、賛成や反対を表明したり、相手の意見を聞きながら、自分の意見を伝えることができる。
話すこと (発表)	○自己紹介や友だち紹介を簡単な表現を用いながら伝えることができる。	○将来の夢や行きたい国について、適切な表現を用いて発表することができる。	○社会的な話題において、自分の考えや意見などを適切な表現を用いてスピーチをすることができる。
書くこと	○自己紹介や友だち紹介を、簡単な英語表現を用いて書くことができる。	○将来の夢や行きたい国について、適切な表現を用いてまとまりのある英語を書くことができる。	○聞いたり読んだりした内容に対して、自分の考えや意見などを適切な表現を用いて書くことができる。
聞くこと	○英語による指示を聞いて、適切に行動することができる。 ○簡単な英語で話される会話文を聞いて、全体の概要や内容の要点を適切に聞き取ることができる。	○スピーチやプレゼンテーションを聞いて、話し手の意向を聞き取ることができる。 ○簡単な英語で話される空港での会話や天気予報を聞いて、概要を理解することができる。	○まとまりのあるニュースやインタビューを聞き取り、概要を理解することができる。
読むこと	○正しい強勢、イントネーション、区切りなどを意識して、聞き手に伝わるように音読をすることができる。 ○簡単な英語で書かれた自己紹介文を読んで、書き手の特徴について読み取ることができる。	○絵日記などの日常的な文章を読んで、書き手の意向を読み取ることができる。	○物語文を読んで、あらすじや大切な部分を読み取ることができる。 ○新聞記事や図鑑など社会的な話題の英文を読んで、必要な情報を読み取ることができる。

STEP1 マッピング作成



STEP2 Writing



- 1分間の中でたくさん質問をすることができた。
- 使えた質問の種類
- 使えた動詞の種類
- マッピングの質
- 聞いた内容を上手に英語でまとめることができた。

回数 () 回

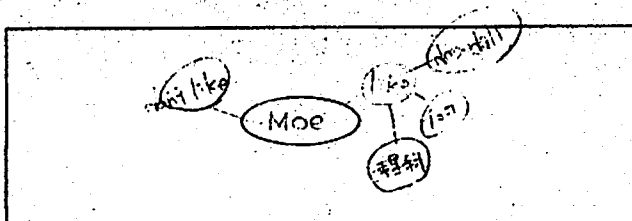
Do-Q ・ Be-Q ・ WH-Q

() 種類

情報量型 ・ 掘り下げ型

5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1

STEP1 マッピング作成

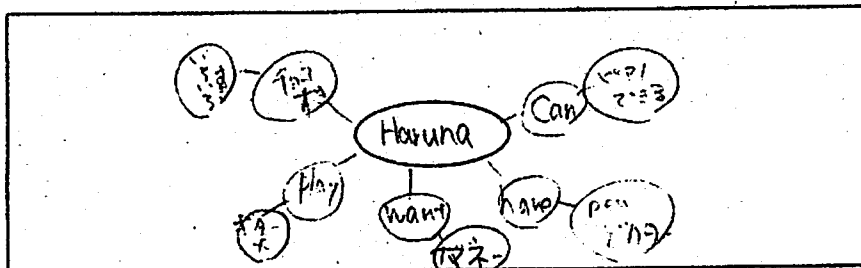


STEP2 Writing

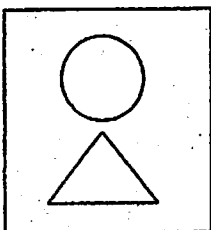
I like baseball.
I like science.
I like chocolate.



STEP1 マッピング作成



STEP2 Writing

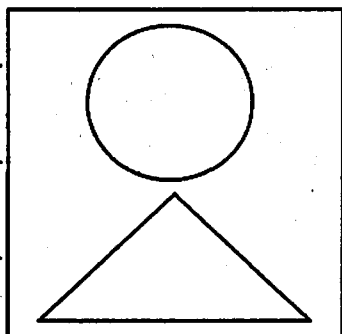


This is my friend, Haruna.
She can plays the piano.
She doesn't play the guitar.
She has doctor grippen.
She wants maney.
She likes chocolate.
She likes many kind of chocolate.

Today's GOAL: 友だちの紹介文を作成しよう！

名前	
好きなもの	
食べ物	
音楽	
スポーツ	
持ち物	
ペット	
家族	
その他	

◎ インタビューの内容をもとに、友だちの紹介文（第1次作品）を書いてみよう。



◎ 今日の授業の振り返りをしましょう。

- | | |
|------------------------------|-----------|
| ① 間違うことを恐れずにインタビューをしましたか。 | 5・4・3・2・1 |
| ② たくさん情報を収集しようとインタビューできましたか。 | 5・4・3・2・1 |
| ③ 間違うことを恐れずに英文を書けましたか。 | 5・4・3・2・1 |
| ④ 色々な動詞を使って英文を書けましたか。 | 5・4・3・2・1 |

Today's GOAL: 友だちの紹介文をレベルアップさせよう!

- ◎ 前回の授業で作成した「友だちの紹介文」を小グループに分かれて発表しましょう。
 その際に、友だちからたくさんの質問を受けて、紹介文をレベルアップさせるためのヒントを得よう。

- ◆ 答えられる情報は英語でそのまま伝えよう
- ◆ 答えられない情報は、保留しておこう → Sorry, I don't know.

	答えられなかった質問事項	その答え
1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		

【主体的・対話的で深い学びが見られる場面の観点】より、本授業での関連性について
(青木 一 信州大学大学院教育学研究科 高度教職実践専攻(教職大学院) 准教授より)

◇比較して意見が言えた場面

自分の紹介文の情報と比較して質問することができたか。

◇関連付けて意見が言えた場面

自分の紹介文の情報と関連づけて質問することができたか。

◇予想を検証した場面

答えられなかった質問に対して、自分なりの予想をしながら、質問することができたか。

◇他者に教えた場面

小グループでの活動を通して、他者から新たな視点を得ることができたか。

◇疑問をもって質問する場面(興味ではなく)

小グループでの発表に対して、様々な角度から質問することができたか。

◇他者の意見から自分の考えを更新した場面

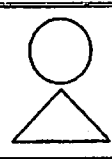
可視化することが難しいため、今回は色を変えて情報を書き加えるようにする。

◇前の考えから今の考えに更新した場面

可視化することが難しいため、今回は色を変えて情報を書き加えるようにする。

資料6 協働学習を取り入れた授業実践 生徒作品

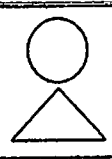
一次原稿

	This is my friend, Ria.
	She likes music very much.
	She likes chess.
	She has five pencils
	and three pens.
	She doesn't like sports.
	She doesn't have family.
	She likes Italian food.
	She likes pizza.
	She has seven pets.
	She has home!!

二次原稿

	This is my friend, Rto
	she likes Led. she likes
	music very much. she likes
	chess. she has three pencils
	and five pens. she doesn't play sports.
	she doesn't like sports. she likes
	Italian food. she likes hamburger pizza.
	she likes chess very much. she doesn't
	like chess. she likes Japanese food.
	she likes miso soup and tempura. But
	she doesn't like sushi. she has seven
	pets. But she doesn't have family.
	she doesn't play the guitar and
	piano. she has home. she likes home!

一次原稿

	This is my friend, Atsuhito.
	He usually gets up at six thirty.
	He likes running, soccer, baseball and Mt. Fuji.
	His favorite music is J-pop.
	He likes taguchi and he is a good player.
	He has pen and tree. His pet is dog, cat and bird.
	He has three children or seven children.
	He looks like a "freaky" Deftones.

二次原稿

	This is my friend, Atsuhito.
	He usually gets up at six thirty.
	He likes running, soccer, baseball and Mt. Fuji.
	His favorite music is J-pop.
	He likes taguchi and he is a good player. He has pen and
	tree. His pet is dog, cat and birds. He has seven children.
	He likes yellow and green. His hobby is running.
	He plays piano. He goes to home at nine o'clock.
	He doesn't live near the river.
	His favorite season is winter.
	His birthday is December twenty-five.

資料7 協働学習を取り入れた授業実践 事後アンケート 生徒コメント

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

・日本語でインタビューするのは簡単だけど、英語でインタビューするのはとても大変だった。最初は、一番最初のときよりは、動詞が使えるようになった。たくさんの人にインタビューすることが楽しかった。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

最初からは、1分間で、5個くらいしか質問することができなかったけど、今日、質問したら、10個になったので、よかったと思いました。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

友達から、いろいろな質問がきて、それを本人に聞くと、すぐに紹介文が増えたので、すごいと思いました。私はまちがえを少しおそれてしま、たので次からは、おそれず、しっかりしゃべれるようにしたいです。深められたので良かったです。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

積極的にインタビューすることができました。
友達からたくさん質問がきて、質問することもできました。
今回の授業でしゅりあってよかった！

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

最初の方は英語がカタコトでインタビューなんて無理だと思っていただけ、みんなが協力して質問とかを考えたので、少しはしゃべれるようになったので良かったです。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

今日のメソッドで話をすることが、沢山のアイデアがわいて、とてもよかったです。そして、紹介文を深く深められたので、楽しかったです。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

友達から質問されることで文章をたくさん増やすことができた。

また、自分の質問することでも相手に対していい質問も見つけることができた。

英語でのインタビューするのは伝えたいことをまとめることが難しくかった。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

友達と教えあうとしても紹介文が深められなかった。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

文章量が確実に増えていった。

cut chocolateなどの単語についてよりふかめることができた。さらに英語が楽しくなりました。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

自分で考えた質問に友達の質問を加えるとより多くの情報を知ることができたので良かったです。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

自分ではあまり考えられなかったことがたくさん出てきてやりほり協力するのは大成功だった。

【今日の授業で感じたことをまとめよう】

自分の説明文に足りないところを友達からもらった質問で

埋めることができたと思います。もっと違う質問も

してみたいと思います。